

一般の部

木島平米ブランド研究会長賞

母の愛が溢れていた

秋本美佐子

四方を山に囲まれた集落。八軒ほどの家が寄り添うように建っているその中に、藁屋根の小さな家が佇んでいる。そこが、私が育った家でした。狭い田んぼで米作りを生業とする、農家でした。祖父、祖母、両親。私が長女で弟と妹がいました。

母は早朝に起きだして朝食の支度をしてくれました。嫁いだから、家族のためにご飯を炊くことを、一日たりとも休んだことはありませんでした。

土間にはくど（かまど）がしつらえてあり、一升炊きの羽釜を乗せると小枝をくべて、たきつけます。火のつきが悪いと、火吹き竹で吹いて火を起こします。煙が目にしみて涙を拭きながらご飯

を炊いていました。

母はご飯を炊きながら、みそ汁を作りました。ご飯が炊けると、炊き立てを仏壇に供えて子供たちを起こしていました。

食卓に家族が集まると、くどから羽釜を持って上がりました。羽釜の熱い取っ手を、タオルで包んで木の枠にぐっと置きました。

「さ、ご飯たべよな」

母は毎朝そう言いながら、羽釜の木の蓋を取りました。開けたとたん湯気がふわっと舞い上がります。その一瞬炊き立てご飯の甘い香りが鼻腔をくすぐります。それは、言葉に言い表せない幸せな時でした。湯気の熱さを避けて顔をそむける母の頬は上気しています。

一番最初に祖父の茶碗にご飯をよそおい「食べてつかあさい」と恭しく、お茶碗を差し出します。祖父は一口ほおぼると、決まって「うまいのう。このご飯は日本一うまい」と唸るように言いました。母は軽く頭を下げて、かすかに微笑みました。祖父の言葉に母の大変さが、報われたような気がして心がほっこりとして和みました。

みそ汁とご飯。他には沢庵があるだけの朝食。

美味しくくて、皆の笑顔が嬉しくくて幸せなひと時でした。